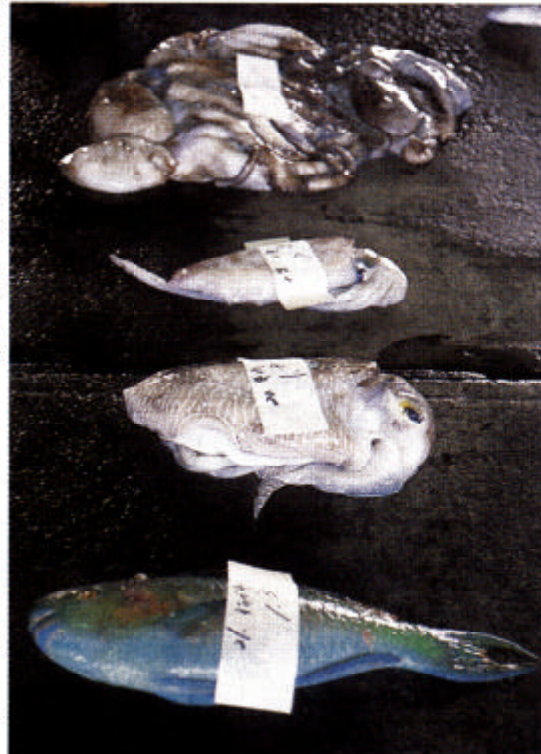


# 家の海から

## 白浜で出会った生きもののたら

35

奄美大島古仁屋港の魚市場で積りにかけられている「コブシメ」。2004年5月



京都大学助教 久保田 信 (京都大学 瀬戸臨海実験所)

## 日本最大の「コウイカ」 「コブシメ」

4月29日、白浜町瀬戸。足を除いた胴体は50漁獲最奥部の船場に「コブシメ」となる。コブシメ(コウイカ科)の。残念ながら、この甲は甲1個が流れてしまった。奄美大島が北限となる南方系で国内最大のコウイカ。長さは25センチほどあり、

破損していない場合は30センチ以上になると考えられる。幅も12.5センチだった。鮮魚店に並んでいる一般的なコウイカと比べると2倍ほどもある。

この大きな甲は、流れのホンタワラ類の間に卵を受精させることだ。

交尾のポイントは、他のコウイカ類と同じようにオスが精子の詰まった精莖(せいぎよう)をメスに渡し、メスが精莖の中に精子を使う。

交尾のポイントは、他のコウイカ類と同じようにオスが精子の詰まった精莖(せいぎよう)をメスに渡し、メスが精莖の中に精子を使う。

北浜にはイカ類の甲が記録種となったもので、よく流れ着く。最も多いのが白色で手のひらサイズが漂着する。細長くて灰白色をしたシンイカの甲も見つかっている。

今回瀬戸漁港で見つけた甲を研究室で自然乾燥させて、重量がどう変化するか調べてみた。予想通り日に日に軽くなってゆき、6日間で95%も減って250gほどになった。やはり水分をたっぷり吸っていたのだ。しかし、水分の蒸発とともに表面に塩の結晶ができると思っただけ、それは確認できなかった。

# ダンス踊るイカしたヤツ

浮かんでいた。まるで氷山のように、前端のくぼき出した状態だった。重さは345gでずりりとした手ごたえだった。

その後、メスは卵囊(らんなん)の入り組んだ形状のインサンゴ類のすき間カプセル状のものに1個ずつの卵を収容させ、このカプセルを一つずつ生

ないが、入り組んだ形状のインサンゴ類のすき間カプセル状のものに1個ずつの卵を収容させ、このカプセルを一つずつ生

その後、メスは卵囊(らんなん)の入り組んだ形状のインサンゴ類のすき間カプセル状のものに1個ずつの卵を収容させ、このカプセルを一つずつ生

## 和歌山県沿岸で漂着記録のあるコブシメの甲の大きさ

標本	甲長(cm)	幅(cm)	採集場所(町)	報告者と報告年代
1	50*	-	田尻の浜(白浜町)	佐々木、1994
2	40*	14	潮岬(串本町)	前 岩、2002
3	46	16	潮岬(串本町)	前 岩、2002
4	30*	12.5	瀬戸漁港(白浜町)	久保田、2004

\*=破損部を入れた推定値

5月下旬から乗船した「豊潮丸」で奄美大島を訪れたとき、古仁屋港にある朝市を見に行った。コブシメは数が少なかったが、プタイなどの色鮮やかな魚類やタコ類とともに賑りにかけられていた。「奄美地方で5月に捕れるコブシメはまだ小振りだ」と地元の人から聞いた。

コブシメの愛情細やかな求愛行動はよく知られている。この独特の行動はテレビでも時折放映される。繁殖期になると成熟したオスは体色をいろいろと変化させ、メスの気を引く。模様を替えるから、胴体の両端全体に伸びたひれをリズムカルに波打たせ、触腕を振り上げる。まさに衣装を凝らして「イカダンス」を披露するのだ。メスがOKすると、しなやかに特長の触腕を巧みに使って抱き寄せる。

コブシメの目は人間のようなレンズ眼で、よく見える。脳も発達しており、行動もこのように複雑に発達したのである。また、恋の強敵が現れると、体を半分ずつ、威嚇用と求愛用に染め分ける芸当をやってのける。

瀬戸臨海実験所周辺の番所崎や北浜および南浜では、ここ数十年間余りにコブシメの甲の断片が漂着した記録がないことを、実験所の諸先輩の極山嘉郎氏や田名頼英氏に教えて下さった。しかし、黒潮貝類同好会の前岩崇氏が紀南地方で以前コブシメの甲の断片が漂着したことを教えて下さった。

白浜町の瀬戸漁港へ漂着した「コブシメ」の甲。和歌山県では4例目の発見



1973年発行の「新日本動物図鑑」の中で、滝澤博士が「コブシメ」の甲が神奈川県三浦市以西の海岸に漂着する」と記している。こんな面白いまで流れ着くのだが、今後、傷んでいない大きな甲が、紀南地方の沿岸で見られることを楽しみにしている。



南西諸島の粟国島(あぐにじま)に漂着した「コブシメ」の新鮮な甲